

presented by
Liry Rain R18 Adult Only

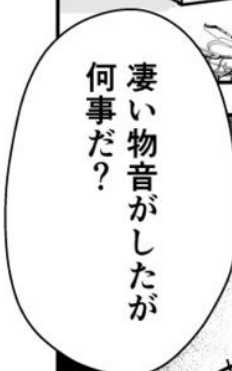
nonisaku hanaha
hananoojini amayakasareru

は 野に咲く花 華の王子 に 甘やかされる

私たち、仮初の結婚じゃ
なかったんですか!?



ハッ





や、ヤマブキ殿下！

無礼を承知で
申し上げます

どうかこのことは
ご内密にして
いただけないでしょうか！

はっ

お恥ずかしながら
我がツツミグサ家は
借金を抱えて
おります……

壺の弁償にあてる
お金がないのです

内密にして
いただけるなら

なんでも
いたしますので……！

……いいだろう

壺は
片付けておけ

新しいものを
手配するよう
侍従に言っておく



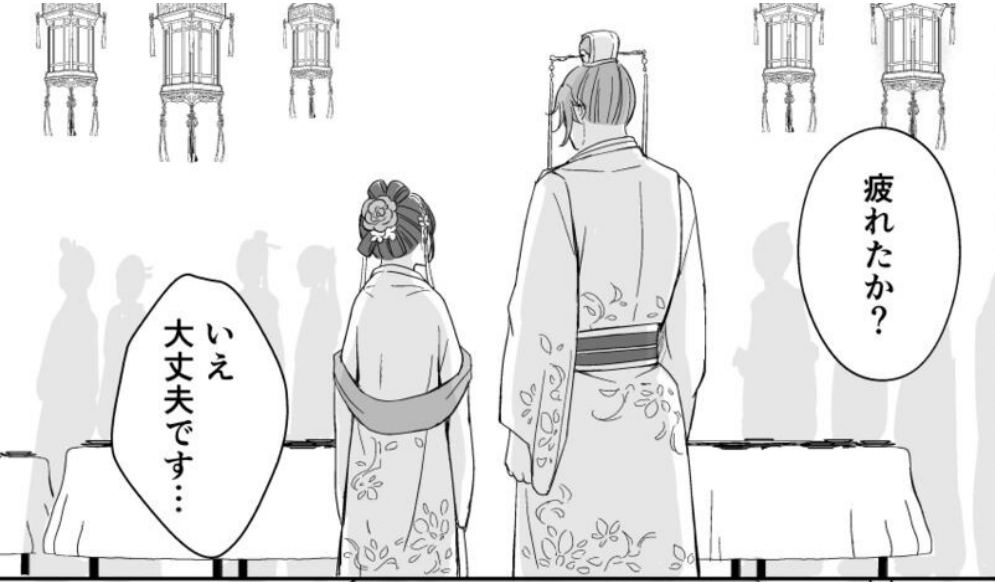
その代わり

ありがとうございます...!!

俺と結婚
してもらおうか

...はい?





疲れたか？

いえ
大丈夫です…



あとは宴会で
終わりだ
気楽にしてい

今日は堂々として
立派だったぞ



あ、ありがとう
ございます…

どうして殿下は
私を選ばれたの
かしら…



仮の結婚
ということは、
後々離縁すると
いうことよね…？

んー？
身分が低い娘の
ほうが都合が
いいとか…？



まるで可憐な花が
咲いているようだ



それより
問題は
しょ…

初夜なんて
やっぱり私には
無理よー！



花嫁衣装も
似合っていたが
その姿もいいな

殿下…！



この髪飾りは
俺の髪色に
合わせたのか

綺麗な薄紅色だな
お前の鴉の濡れ羽色
のような髪に
よく似合っている



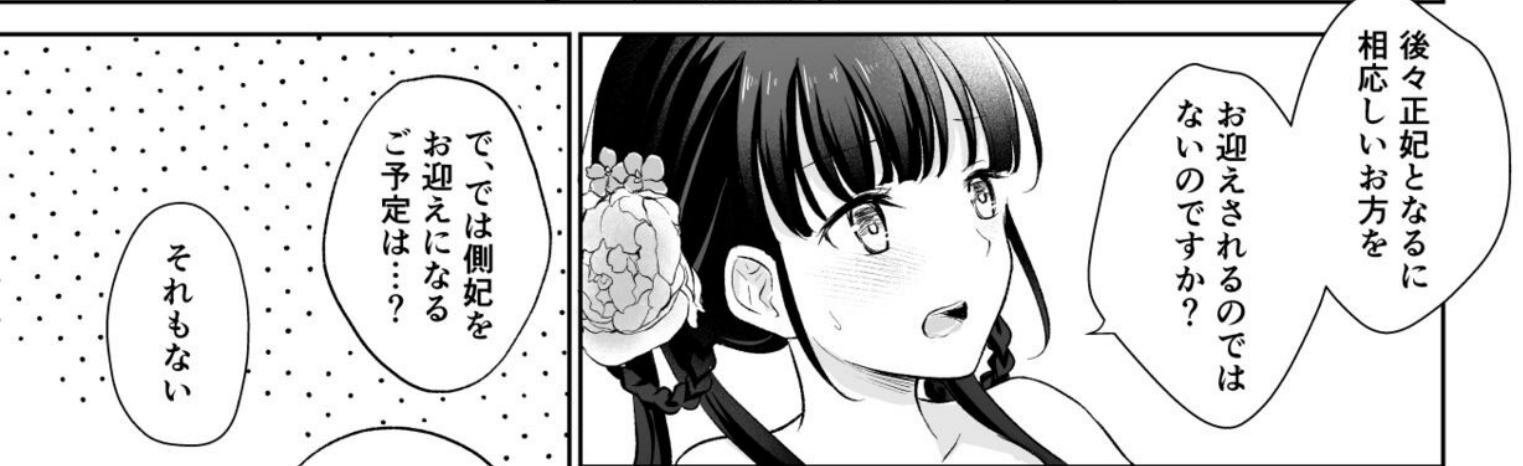
おおお待ちください
私たちは愛し合って
結婚したわけでは
ないですよ

このような…必要
あるのですか…!?

必要あるに
決まっているだろう

世継ぎを産んで
もらわねば

!?



後々正妃となるに
相応しいお方を

お迎えされるのでは
ないのですか?

で、では側妃を
お迎えになる
ご予定は…?

それもない

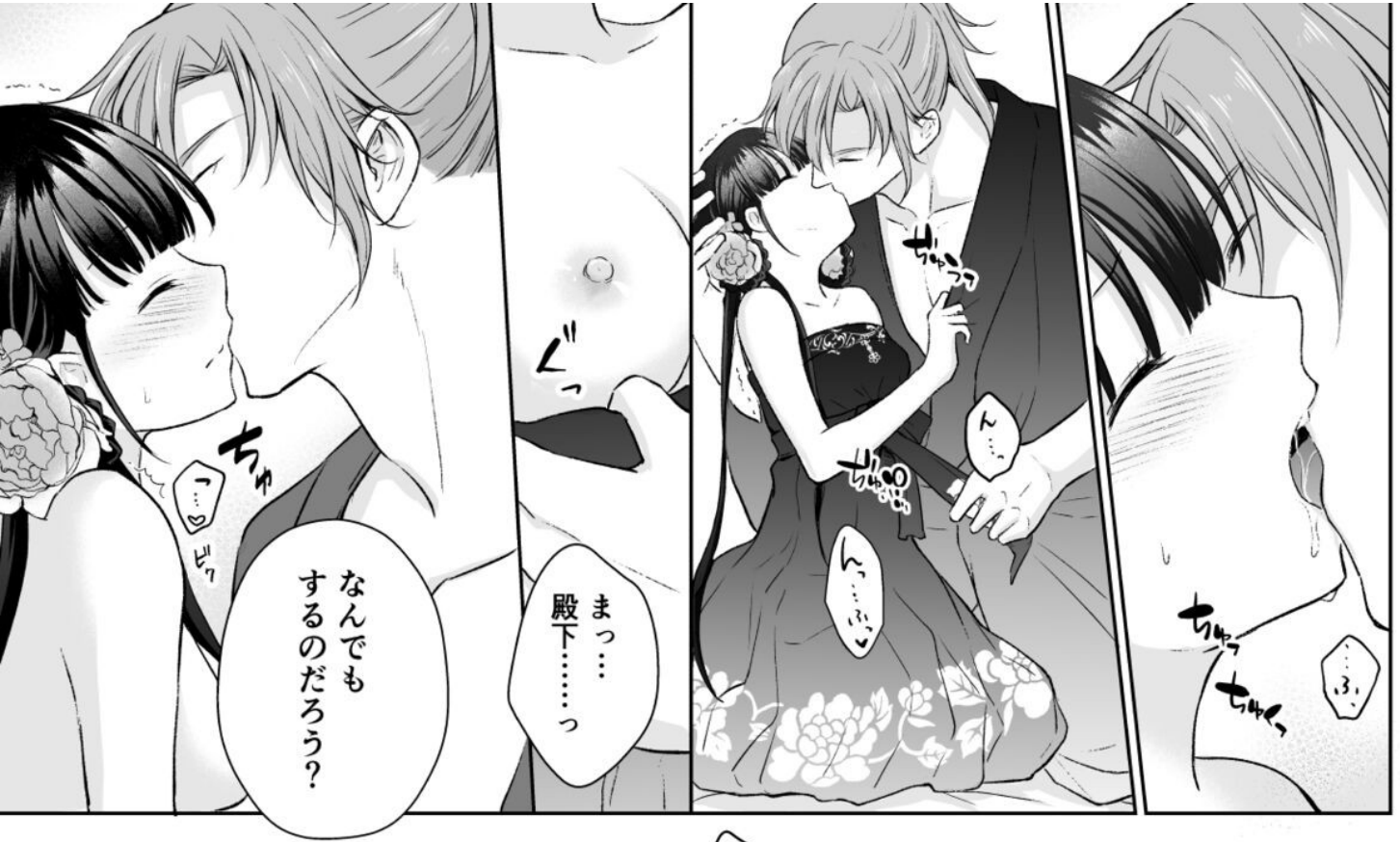
先々代までは
側妃を迎えていたが
祖父も父も正妃のみ
だったからな

俺もそれに
ならうつもりだ

そんな
つもりはない

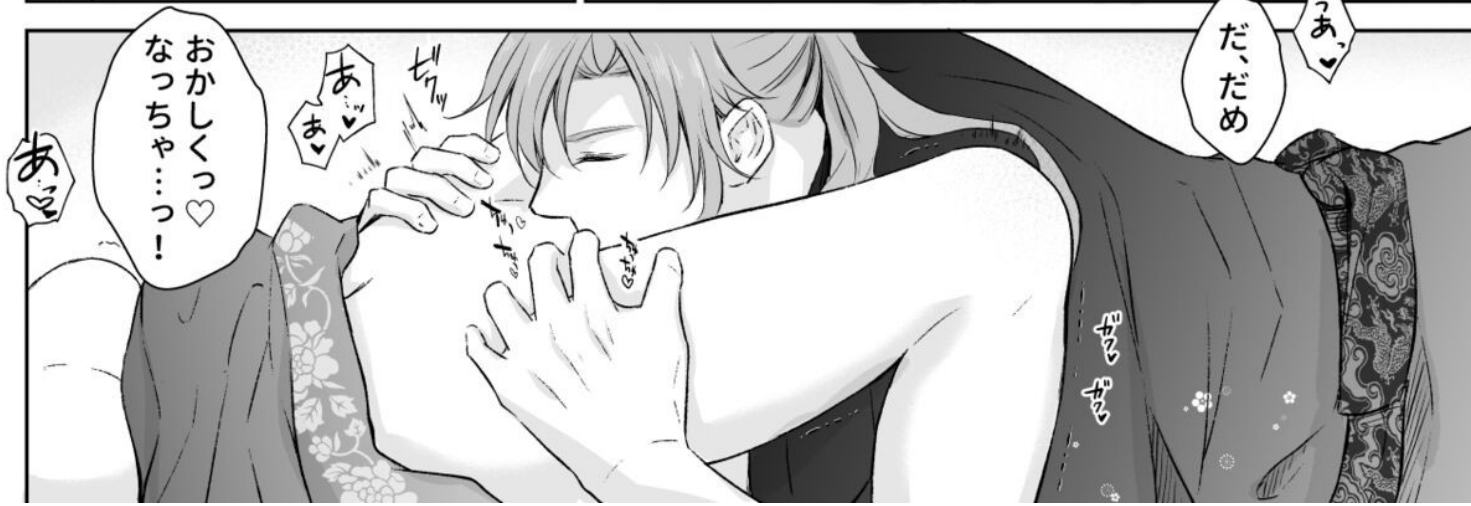
















動いても
大丈夫そうか？



これで本当に
俺の嫁だな

今後、俺に遠慮は
いらんぞ？

ふあ…
はい…



あ……
だ、大丈夫です…
殿下……



殿下ではないと
言っているだろう



……っや、

あ、あ、あ



名前で
呼んでみる

やさ、

やさ、



ああ、俺はいい

ヤマブキ殿下
ノバナ様
花茶でございます



ああ
ありがとう

殿下
この度はご結婚誠に
おめでとうございます



今日はただの
茶会だ

堅苦しいものでは
ないからな
茶と菓子を楽しむ
といい

は、はい



なんて地味な
黒髪なのかしら

どうして殿下は
あんな身分の低い
田舎娘と……

なんでも侍女を
やっていたそう
ではありませんか

色目でも
使ったのかも
しれませんわよ

まあ！ さすが
教養のない人は
やることも
下品ですね

聞こえますよー

分かっているわ
私じゃ殿下に
相應しくないって
ことくらい

でも借金が
なくなるんだもの……
仕方ないじゃない！

私みたいなのが
王妃なんて

やっぱり皆
嫌に思うわよね……

ノバナ様は
お疲れですか？

！ つい
ぼーっとして……



昨夜は少し
お前を構いすぎて
しまったかな

ヤ...

っ！



はは、実は
そうなんだ

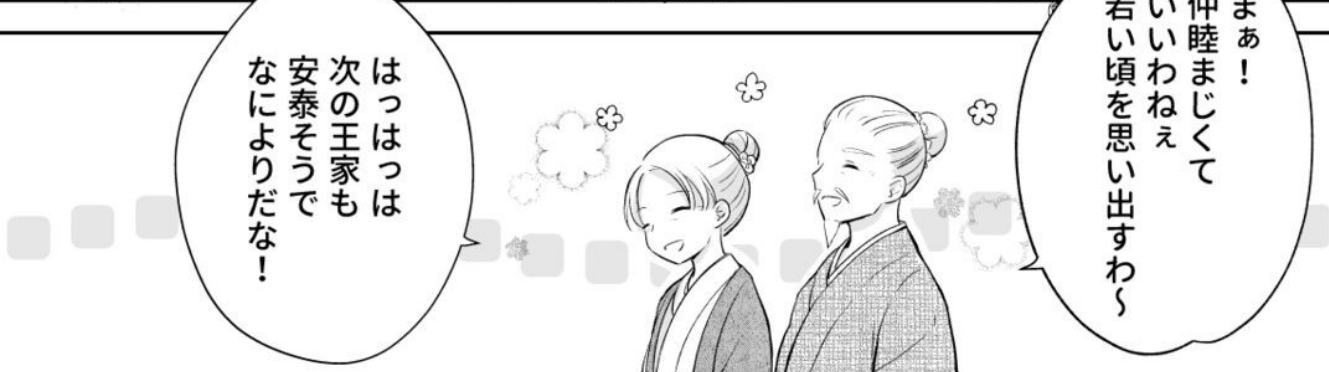
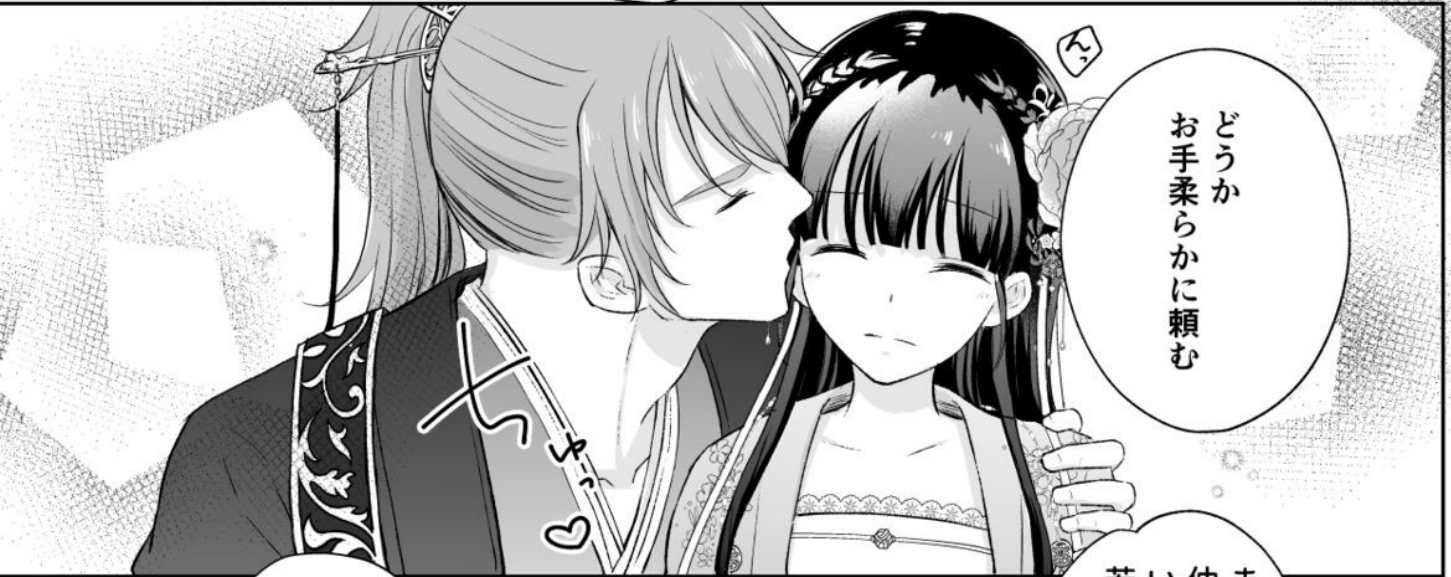
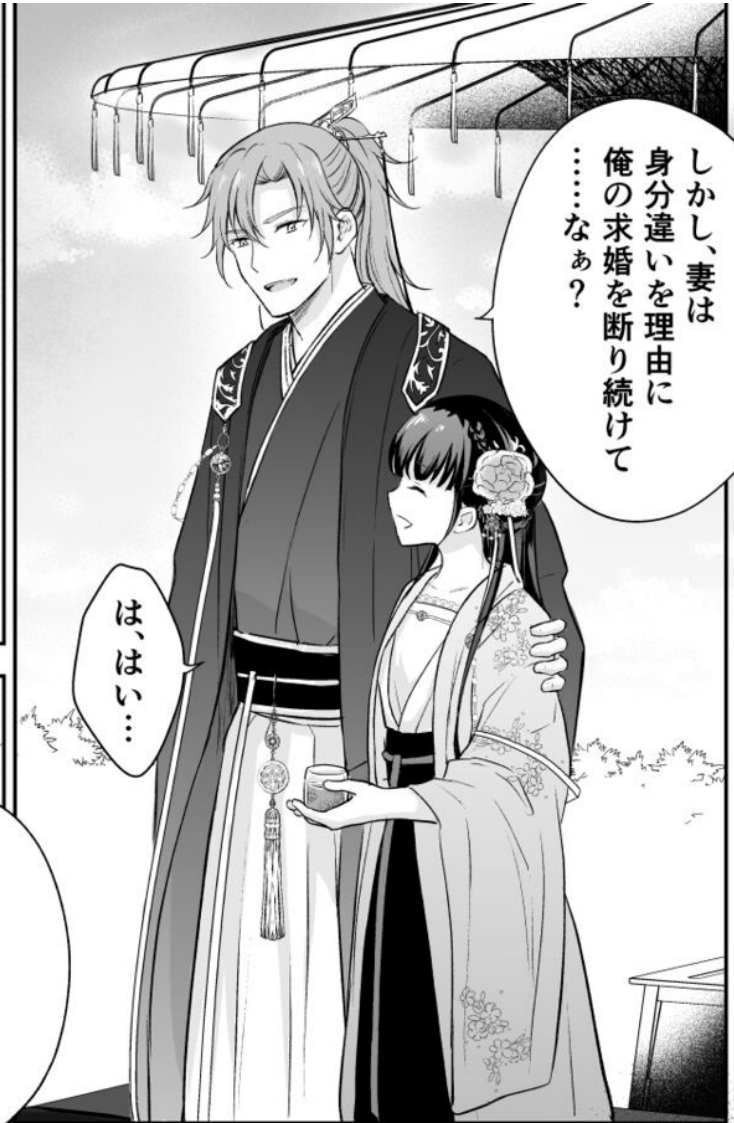
懸命に仕事をする
彼女の姿に惚れてな



はっはっは
殿下に愛されて
ノバナ様も
大変ですなあ

殿下の
一目惚れだった
と聞きましたぞ？

まあ
運命的で
素敵ね







……えっ？

乳首を吸っても
可愛い声が
聞こえん

す、すみません
少し考え事を…

考え事？

あ…っ！

せっかくの
夫婦の時間なのに

よそ見を
するとはな

はあ…あっ♡
よ、よそ見なんて…っ



一体
なにを考えていた？

あ♡あ♡♡
や…でんか…っ

俺は殿下という
名前ではないと
言っているだろう

あ…っ♡
や、ヤ、マブ、キさま
この体勢、はずかし…
です…っ

言え
何を考えていた？

もっと恥ずかしい
姿勢なら何度も
味わっているではないか

っ!!♡♡♡





殿下の
当たってる……っ



毎晩は疲れるから
遠慮していただけるのは
ありがたいけれど……

……あの

ん？



その、でん……
ヤラブキ様は
辛くないのですか？

はは
俺の愚息がすまん

落ち着くまで
時間がかかって
しまうものでな……

その…行為を
しなくても

ヤマブキ様の……
が、満足できる方法は
ありますか？

……そうだな
それでは
少し手を貸してくれ

…手、ですか？

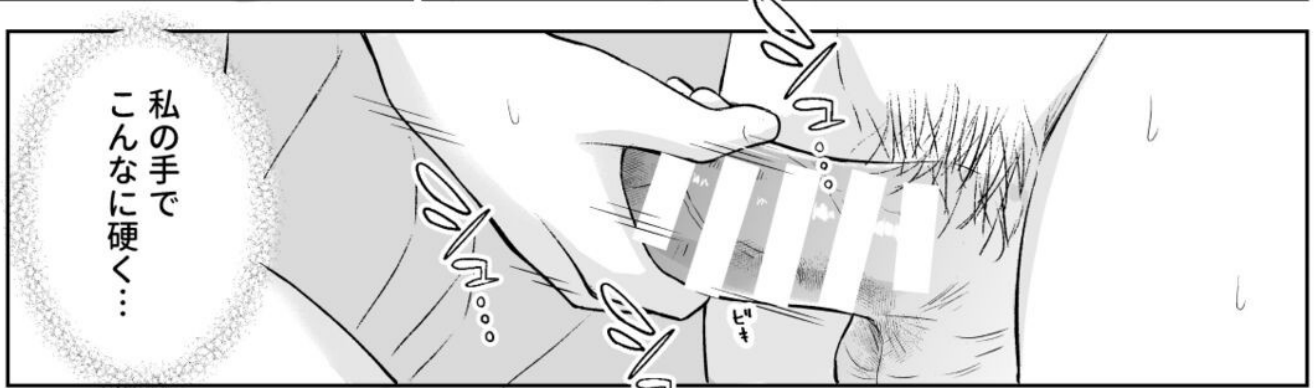
こっちを
向いて……

そっと握って
上下に擦るんだ

……うう
これはこれで
恥ずかしいわ…

……こう、
ですか？

たす…





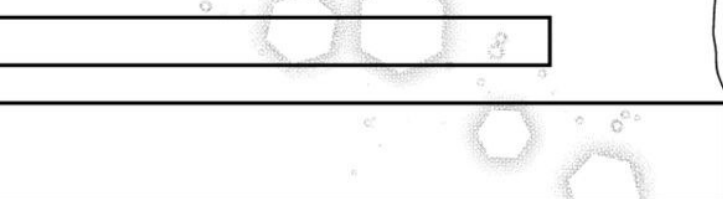
はは
清めるか
湯を運ばせよう



物欲しそうな
顔をしているぞ

やはり中にも
欲しくなったか？

……っ！
べべつに
違います！



結婚するまでも
してからも

ずっと
忙しかっただろう

あ……はい



明日はゆっくりと
羽を伸ばすといいい



明日は故郷から
幼馴染がやってくる
のだったな



意地悪だったり
優しかったり

ヤマブキ様は私を
どうしたいのかしら…



この度はご結婚
おめでとうございます
ノバナ妃殿下

本日は
お招きいただき
至極光栄に存じます

あわ…



ノバナ様のご友人
素敵ね〜！

あとでお声がけ
できない
かしら…？

もう！ 立って！
そんな堅苦しいのは
いらないわ！

はは
一度こういう風に
挨拶をして
みたかったんだ



ええ久しぶり
ミズキ



久しぶりだね
ノバナ



剣術道場は
どうだった？



ああ！
素晴らしい活気に
満ちていたよ
さすが王都だな！

僕が行った道場は
オウランの元兵団長が
やっているところでね

たくさんの
学びがあったよ

それは
良かったわ



ノバナは綺麗に
なったね

どこからどう見ても
美しいお妃様だ

え、ええ…



何、その反応
もしかして
あまりいい関係では
ないの？

あ、うん
そんなことは
ない…

ノバナ！？

ふわ

のっ！？

ご、ごめんなさい
ミズキ

つまずいて
しまって……

ノバナ、本当に
大丈夫？

…ミズキ？

王妃になると
聞いてから、ずっと
心配していたんだ

愛奪略...

ふおおお!!

もし、ノバナが将来
王妃になることを
重荷に感じているのなら

……ミズキ
心配してくれて
ありがとう

僕は君の
助けになりたいんだ

なんでも
遠慮なく
言っほしい

確かに、王妃になる
自信はないけれど...
でも大丈夫よ

殿下は私に
よくして
くださっているし

それなら
いいんだけど...

ミズキは
変わらないわね

今日、あなたに
会えてよかった...

ノバナ!



来なさい

殿下…っ!?!
一体、どうなさ……

え?

お待ちください
殿下……!!

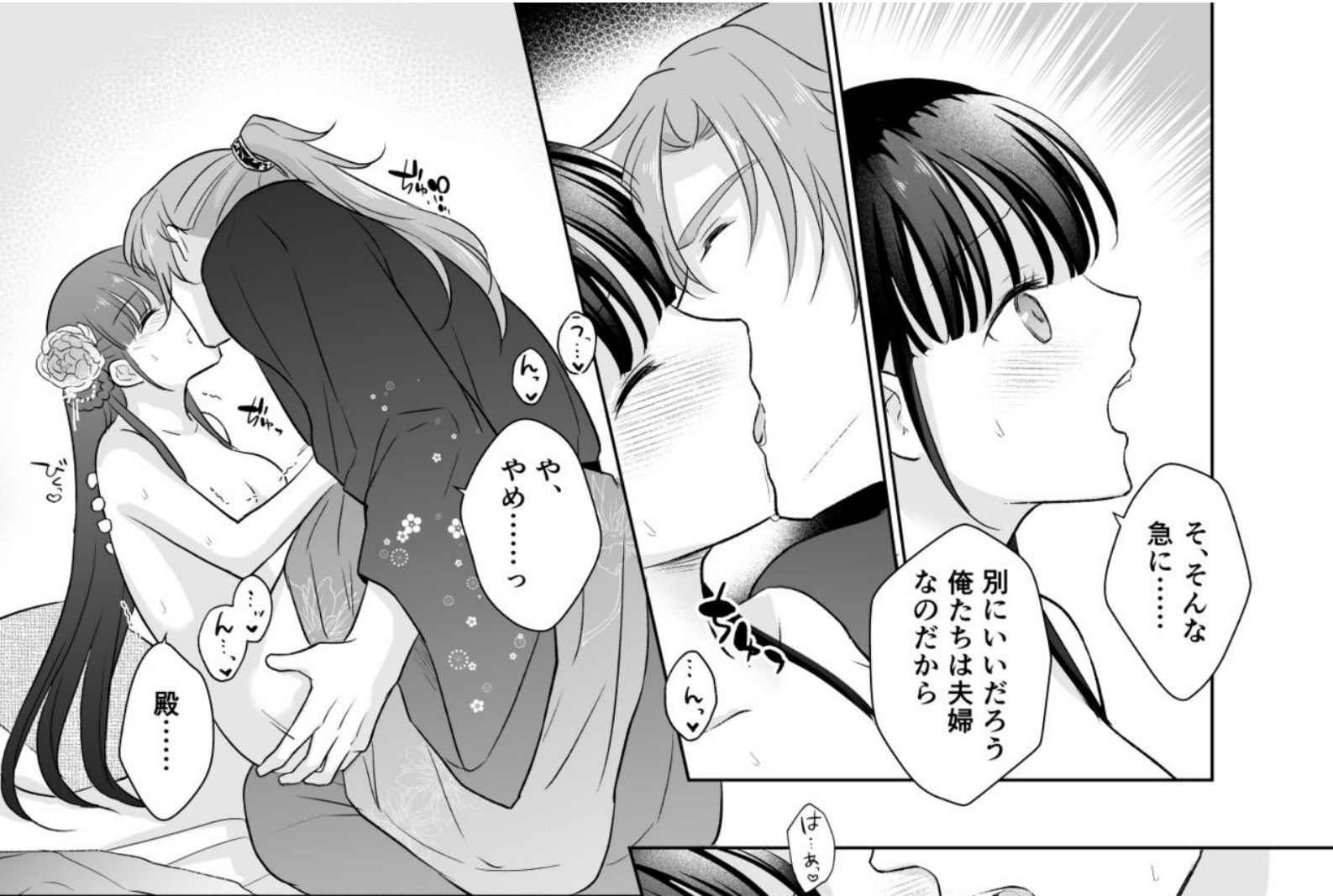


……?
……?

で、殿下!
何を……

寝台の上で
男女がすることは
一つしかないだろう

っ



別にいいだろう
俺たちは夫婦
なのだから

そ、そんな
急に……

俺は殿下という
名前ではないと
言っている

で、殿下

何か、怒って
いらっしやる…!?

や、
やめ……っ

殿……

ま、待って
くださ……っ

あ…ヤマブキ様…
恥ずかしいです…っ

たまには
こういうのも
いいだろう

そうだ
目隠しでも
するか？

そうすれば
俺に抱かれる間
好いた男を
想像しやすいだろう？

好いた、男…？

なかなかの
美青年だったなあ
幼馴染とやらは

お前はあのような
男が好みだったのだな

ち、ちが…
あ…っ♡あ♡



ミズキは
女性ですっっ!!

……どう見ても
男にしか
見えなかったが?

ミズキは
剣士の家系で…

都合がいいといって
昔から男装を
しているんです

今は田舎の道場で
師範をしています

…そうだったか
すまない
お前から幼馴染は
女だと聞いていたゆえ

嘘をついてまで
会いたかった男なのかと
勘ぐってしまった

あの、違ったら
申し訳ないのですが…

その、殿下は
嫉妬…を?



……そうだ
俺はお前のことを
好いている

些細なことで
妬いてしまうほどにな
だから結婚したのだ



でも、結婚は
お見合いから
逃れるためだと…

そんなものは
建前だ

お前のことは
以前より知っていた

よく侍女長に
叱られていただろう

ご覧になって
いたのですか…!?

侍女長は
厳しいからな

城勤めを
辞めてしまう
者もいるんだ



お前もすぐ故郷に
帰るかと思ったが

失敗してもめげずに
頑張っている姿を
見ているうちに

だんだん
目が離せなくなっとな

だが立場上
近づくのは難しかった

あの日、お前に
会ったのは偶然で

なんでもすると
言われて、機会に
恵まれたと思ったんだ



夜伽を命じること
できたのだが

それでは妾の扱いになり
お前の立場が悪くなる

俺は必ずお前を、正妃に
するつもりだったから
結婚を強行した

お前の心変わりを
待てなかった
許してくれ



俺はお前を…
ノバナを心から
好いているんだ

始まりの
順序は違って
しまったが

この先、俺に挽回の
機会をもらえないか？



わ、私は、その
殿下を好きなのか
わかりませんが…

そ、それでも
よろしければ……

構わん
必ず惚れさせて
みせるからな

ガシッ



ほう、俺の好きに



?

ヒョタ



……あ



いや、無理矢理に
しようとしたばかりで

普通に口づけて
よいものなのかと
思ってたな

お好きになさっても
いいです、よ……？



でも、しばらく
言わなくていいわよね

私だって
意地悪しても
いいですよ
ね
ヤマブキ様？



ノバナ
愛している

ずっ
と...

はい
ヤマブキ様

どうせ
近い将来

言わされそうな
気がするもの

※本編をお読みになった後でお楽しみください。
時系列は本編の1年後です。

【華の王子は野に咲く花を愛でたい】 著..蒼風美郷

「ヤマブキ様！ お聞きになりましたかっ？」

今日一日の公務を終えて夫婦の部屋へと戻ると、早々に妻の喜々とした笑顔に出迎えられた。

ノバナの澄んだ水のような青色の瞳が爛々としている。その目を見るだけで余程嬉しいことがあったのだとよくわかる。

「ミズキのことだろう？ 相手は元兵団長の息子だそうだな」

「そう、そうなのです！ 実は子を身籠ったらしくて今日ミズキから結婚の報告を受けたのですが、もう自分のことのように嬉しくて！」

ミズキとはノバナの幼馴染だ。彼女の家が代々伝えている緋衣流剣術を広めるために半年前に上京したと聞いている。元兵団長の息子と出会ったのはそのあたりのはずだから、結婚が決まるまで早いように思う。しかも懐妊も同時ときた。それだけ強く思い合っているということなのだろう。

俺にとってミズキとの出会いはなかなか苦い思い出だ。なにせ彼女はそこの男子が霞んでしまうほどに麗しい立ち姿をしている。彼女がノバナに会いに来るたびに城の侍女たちが熱い視線を向けているくらいだ。

それ故に俺はミズキを男と勘違いしてしまったのだが……この話はやめておくか。

「さて、幼馴染の結婚報告にはしゃぐのは分かるが……夫が帰ってきたのだ。何か言うことは？」

するとノバナの顔から笑顔が消え、何かに気付いたかのように口を

「あ」の形に開く。

ノバナの白い頬に薄紅が咲いた。

「お帰りなさいませ、ヤマブキ様」

「ああ。——ただいま、ノバナ」

咲いた薄紅に向けてちゅっと口づける。

ノバナが照れくさそうに俺から視線を外す。夫婦となつてからもう一年が経つというのに、未だに彼女は初々しさを見せてくれる。

これが俺にだけに向けられているのだと思うと胸の奥が熱くなる。俺は彼女をそつと抱き寄せた。

「あの、ヤマブキ様……ずつと聞いてみたかったことがあるのですか」

「ははは。そんな遠慮がちに問われると緊張してしまうな。——なんでも聞いてくれ」

「……ヤマブキ様は、どんな風に私を好きになったのですか？」

一体何を聞かれるのかと思えば、予想もしていなかった問いかけに俺は苦笑した。

彼女を腕から解放して、彼女を抱えあげると、突然のことに小さな悲鳴がこぼれ落ちる。

きょとんとして俺を見上げる青色の瞳に向けてニヤッと微笑む。

「その質問に答えてやってもいいが……その前に、ノバナの話も聞かせて欲しいものだ」

これまでに彼女と過ごしてきた日々を思い返してみても、彼女の想いはすでに俺のほうに向いていると確信している。

しかし、意地悪な俺へ意趣返しとでも言うように、彼女の口が愛を紡いだことは未だにない。

そろそろ口を割ってもらったときが来たようだと、俺はノバナを寝台へと連れて行った。



俺が初めてノバナを見たのは、彼女が壺を割った現場に遭遇する半年前のことだ。

物干し場でノバナが竿台に足を引っかけて盛大にすつ転び、これから干すはずの洗濯物をぶちまける瞬間に出会った。

絵に描いたような見事な転びっぷりに思わず感心してしまったのが始まりだ。

とんでもない事故に遭遇したからには手助けをするべきだろう。しかし、なんとなく物陰に隠れて様子を伺っていると、大慌てで立ち上がった彼女は急いで敷布を拾い集め始める。遠目からでも「どうしよう」と焦る彼女の声が俺の耳にも聞こえてきた。

溜め息をこぼした彼女がふと動きを止める。何かを見つけたのか地

面をじーっと見つめているようだった。

表情が一変して、明るい笑顔が咲く。どうしてそんなところで花開いたのか、彼女が見つけたのは小さな花だった。

ここでは誰かに踏まれてしまうと思っただろう。ノバナはその場に屈み細い指先で一生懸命地面を掘り始めた。根を切らないように気を付けながらそっと花を抜き、陽が当たってかつ踏まれそうにない端のほうへと植え直す。

土で汚れた手では洗濯物を触れないと言うのに、そのときのノバナの表情と言えども優しい微笑みを浮かべていた。

その微笑みを見た瞬間、俺は胸の奥がどくと高鳴るのを感じたのだ。

初めての感覚だった。その頃にはすでに何人かの婚約者候補と顔を合せていたが、誰一人として俺の心は動かなかったというのに。

俺はこの瞬間、彼女の微笑みに惹かれ、彼女に心を奪われてしまったのだ。



「っあ、ヤマ、ブ、キ……さまっ……んっ」

大きく震えそうなその直前を見計らってノバナの中から指を抜くと、切なく甘い声が俺の耳をくすぐった。

まるで「意地悪」と訴えかけられているようなその響きに腰のあたりがざわざわとする。

「うう……」

「どうした？ 気のせいかな、不満げのように見えるぞ？ 何か気に入らないか？」

潤んだ青色の瞳が俺をじっと見上げる。

その視線に意志がぐらつきかけるが、ここはぐっと堪えた。

熱く潤ったその場所にもう一度触れ、ノバナが最も大きく震えてくれる粒を撫でてやる。

「俺とお前が夫婦になってから早くも二年が過ぎたな」

「ふっ、あ……あっ、ん……っ」

「そろそろ、何か俺に言うことがあるのではないかな？」

「つく……ん、ん……う」

ノバナがもどかしそうに脚を擦り合わせる。俺の手が柔らかな太もに挟まれた。これでは手を動かさない。

しかし指先は自由だ。濡れそぼる中に中指を忍び込ませ、彼女の息を荒くさせることができる。

「お前が俺に向けてくれる眼差し、俺に掛けてくれる言葉に、表情。

俺がお前に注いでいるものと同じものを感じているのだが、俺の気のせいだろうか。なあ、ノバナ？」

くちゅくちゅと淫らな水音を立てる内側がぎゅつと収縮して俺の指を強く抱き締める。

もう何度も高みのその直前まで押し上げては寸前で留めるのを繰り返してきた。くすぶり続けていた快楽があつという間に火をつけてノバナを昂らせているのだ。決してそれ以上を与えないように俺が触るのをやめると、再びノバナから切なそうな嬌声が聞こえてきた。

「そろそろ俺に意地悪をするのはやめてくれ、ノバナ」

「——っ、いじ、わる、なのは……っ、ヤマづキ、様のほうです……う」

「俺は好いた相手に意地悪をしたい性質だと言っただろう」

「うう……」

焦らされ続けたせいにか、果実のように顔を真っ赤にしたノバナに顔を近づける。

恥ずかしいとでも言うように視線が逸らされそうになったが、指先で顎を持ち上げて俺を見るように仕向けた。

「ノバナ、愛している。……お前は？」

澄んだ水のような瞳が動揺しているかのように揺れ始めた。

決して視線を逸らさず、真っ直ぐに彼女を見つめ続ける。しばらくの無言が俺たちの間を漂う。

「わ……私、も……です……」

蚊の鳴くような声だったが、それでも充分だった。——今は。

「次ははっきりと言ってもらうぞ、ノバナ」

「っ、あ、あッ」

彼女の脚の間に先を押し付けて、遠慮なくその身を滑りこませた。

焦らした反動か、その瞬間激しいうねりが俺を包み込む。おそらくこれが追い打ちとなって、達してしまったのだろう。

釣られて俺も吐精してしまいそうな凄まじい快楽に奥歯を噛む。

しばらくそのまま動きを止め、強い波を受け流す。

「さて、今夜は決して離さないぞ。ノバナ」

「……え？」

「今夜いっぱい励めば、ミズキの子と同じ年になるだろう。子供同士も仲良くなれるといいな」

「え、あの、殿下……？」

「俺は殿下という名前ではない。——さ、そろそろ黙らないと舌を噛んでしまうかもしれないぞ」

「——っあん！」

喜びをぶつけるかのようにノバナの最奥を突く。

長く熱い夜の始まりだ。

早くて来月には今日の成果が表れることを祈りながら、俺はノバナを愛でることに勤しんだ。

今作をお手にっていただき本当にありがとうございます!!

前作に引き続き蒼風美郷先生に素敵な原作をいただきました。感謝!
前作と同じ世界のオウラン国が舞台で、ちょっと前の時代のお話になっています。

TL小説が昔好きでよく読んでいたのですが、TL漫画は現代ものが
多い気がしていて、TL小説みたいなファンタジーのエロ漫画が読みたい……!

というかねてからの私の願望で製作されました。
中華風(ちょっと和も入ってます)ファンタジー、身分差、いいですね…。
お楽しみいただけたら嬉しいです。

そして今回は蒼風美郷先生に書いていただいたおまけ後日談が入っております。
ヤマブキ様視点のお話でとっても素敵でにやにやしながら読んでしまいました!
本編では語られていないあれこれが楽しめますので、
そちらもぜひぜひ!読んでお楽しみください。

フォロー、応援コメント、レビューなどいつもありがとうございます!
次作は異世界転生の予定です。またお手に取っていただけたらとても嬉しいです!

Liry Rain 柚子ゆう

野に咲く花は華の王子に甘やかされる ～私たち、仮初の結婚じゃなかったんですか!?!～
2022.08.05
Liry Rain / 柚子ゆう
yuzu27r@gmail.com
Twitter: @liry_rain
<https://ci-en.net/creator/5921/>
※書店様によっては本編のみとなっておりますので、おまけ後日談が入っていない場合は
上記サイトをご参照くださいませ。

原作：蒼風美郷(Twitter: @3535miigoo)
表紙デザイン：カジデザイン

無断転載、複製はご遠慮ください。